

指名コンペティションの結果について

第 17 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展－日本館キュレーター指名コンペティションにおいては、6 名の候補者に参加を依頼したところ、以下 4 名の方からご提案をいただき、選考の結果、門脇耕三氏がキュレーターに選出されました。

氏名	展覧会テーマ
門脇 耕三（明治大学理工学部建築学科准教授）	建築のリサイクル - モノと生産の循環をデザインする
豊田 啓介 （株式会社ノイズ パートナー）	情報と環境と身体とその混淆 - Ghost out of the Shell
馬場 正尊（株式会社オープン・エー/Open A Ltd. 代表取締役 建築家、東北芸術工科大学教授）	工作的都市 IMPROVISATION CITY - 衰退の先の風景を探すために
山梨 知彦（株式会社日建設計 常務執行役員 設計部門プリンシパル）	切り離された建築 現代の過密な社会における暮らしと建築の問題

（候補者氏名五十音順、敬称略）

建築展事業委員会の講評は次頁のとおりです。

建築展事業委員会（敬称略・五十音順）

委員長： 三宅 理一（東京理科大学客員教授）

委員： 秋元 雄史（東京藝術大学大学美術館館長）

五十嵐 太郎（東北大学大学院教授）

ウスビ・サコ（京都精華大学学長）

西沢 立衛（西沢立衛建築設計事務所代表）

松岡 恭子（(株)スピングラス・アーキテクト代表取締役）

講 評

令和 2 年（2020 年）の第 17 回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展日本館展示に関し、建築展事業委員会は展示キュレーションの候補者を定めるべく、候補者の絞り込みを行い、それにもとづいて最終候補者の面接と展示キュレーターを選出を行った。

その手順は以下のようなものである。まず推薦者の推薦を受けた書類選考の結果、6 名の候補者が選出され、展示企画に関するコンペティションへの参加を依頼したところ、以下の 4 名が応募要項にもとづき企画提案書を提出し、最終選考が実施された。

- (1) 豊田啓介
- (2) 馬場正尊
- (3) 門脇耕三
- (4) 山梨知彦

各候補者は選考委員（事業委員が兼任）を前にそれぞれ 40 分のプレゼンテーション（発表・質疑応答）を行い、4 名全員のプレゼンテーションが終了した後に、選考委員の間で選考を進めた。以下、その際の議論の要点を記す。

豊田啓介氏の案「情報と環境と身体とその混淆 Ghost out of the Shell」はデジタル時代の中で新たな拡張現実を前にして、来場者に情報と物質の間に生起する新しい認識世界を体験させることが提案されている。参加メンバーも人工知能、ユビキタス性、ロボティクスなどを専門とした第一線の研究者、さらにメディア・アーティストらからなり、現代の情報技術を駆使した新たなメディア・コミュニケーションの可能性を示唆している。しかし、現時点で参加者のコモン・グラウンドが成立しておらず、これからヴェネチアに向けての共通基盤をつくり技術開発を行うのであれば圧倒的に時間が足りない、Google などの先端産業に比してそれを凌駕する質を担保できるかといった問題が提起され、さらに「電気依存型」の姿勢が 21 世紀のライフスタイルを本当にリードするのかといった文明論的な疑問も提示された。

馬場正尊氏の案「工作的都市 Improvisation City 衰退の先の風景を探すために」は、衰退の兆しを見せる現代日本の都市状況を切り取り、そこから仮設的な建築をつくり上げていくプロセス自体を展示空間となすものである。観察・採集・移送・仮設・工作・循環というステージを設け、地方都市で廃棄されていく建築の断片をヴェネチアに移してインプロビゼーションの構築物を制作する。ある面では 1995 年の阪神淡路大震災に際してヴェネチアに移設された廃墟の瓦礫を連想させるものであるが、写真家や建築家に加えてデッドストック工務店なるフリーランスの職人集団、産業廃棄物処理企業などの参画で、災害や経年変化の中で、合理性を捨象した「もの」としての建築のライフサイクルを具体的かつ祝祭的に示すことになる。風景の実験としては可能性があるものの、一方では冗長さが気になるとの指摘があった。

門脇耕三氏の案「建築のリサイクルモノと生産の循環をデザインする」は、4名の中でもっとも工学的なアプローチを前提としている。昭和40年代のごく当たり前の住宅を解体し、段階的にヴェネチアに移設することで循環型社会の構図を批評的に展示することを目標とする。物性にこだわり、日本から移送される解体部材を日本館内部にストックし、それが再利用されて室内や外構等に新たな構築物を創りだしていく様を見せる動態展示である。技術革新期の日本の建築に織り込まれていたさまざまな要素（素材・構法・設備など）が半世紀後のイタリアに出現し、それらが日本の職人たちによって徐々に再編成されていくプロセスが示される。気になるのはタイトルで、今日としてはあまりにも当たり前の政策用語を提示するだけで、この動態展示が見せるコンセプトにそぐわない、工学的課題の上位にたつべき大きな概念が必要という指摘があった。

山梨知彦氏の案「切り離された建築 現代の過密な社会における暮らしと建築の問題」は現代日本における引きこもりや幼児虐待の問題を前面に出し、しかも現代美術家の手によってその深層構造を導き出すという点で、もっともアートのアプローチである。4人のアーティスト（西野壮平・渡辺篤・見里朝希・小島美羽）がそれぞれ都市の過密、閉鎖空間のインスタレーション、パペットアニメ、遺産整理としてのジオラマ的模型を展開し、日常生活の中に潜む生と死の問題に迫る。アーティストのコラボレーションは避け、キュレーターと個々に対話し、ソリューションを出す前に体感し考えることを促す展示空間となる。今日のネガティブな都市生活を前提に、負の側面を強調するアート作品は強い批評性をはらんでいるが、建築展としてキュレーターの建築への関与が見えにくい、未来の建築の予兆をどのように示すのか、といった点が議論的となった。

上記4名の案を比較した場合、いずれも作品主義的な方法を排し、現代日本のある側面を切り取ってそれを増幅させて展示空間に実現させるという手法をとる。豊田案は、デジタル時代の魅力的なメディアのあり方を示しながら、具体的な技術開発がこれから始まるということで、工程管理、予算管理面でのリスクがきわめて大きいと判断された。他方、馬場案と門脇案は、日本の建築の解体・移設・再構成という点で共通した内容を含んでいるが、馬場案がやや情緒に流れ、リロケーションのロジックを未だ構築しきれていない点で、明快な方法論を提示した門脇案が上位に立つとされた。ただ、門脇案のタイトルの陳腐さは大きな問題である。逆に、山梨案はアート作品の圧倒的な力に依拠し明快な主張をもちながらもそれに匹敵する建築の存在が示されていないという点で減点の対象となった。

これらの議論を総合した結果、門脇耕三氏を日本館展示キュレーター候補（ただし選考委員会としてタイトルの変更を求める）として推薦するに到った。

令和元年5月31日

建築展事業委員会委員長
三宅理一